

帰ろうと思つて」もう真青な顔だつたその人。「お前はどこの者だ」囲炉裏端には義父とその友人の前町助役が座りお茶を出している私が座つていた。尋問されているのはその前助役の甥とかと聞いていたが、前助役は一言も何も言わらず、後難を恐れて自分はかかわりたくないのにとの思いが黙つている。可哀相で何とかしてやらねばと思つても当時の嫁は口には出せないし再度義父に頼むとの目を向けたらやつと「近所の親しい家の息子だから」との説明で、しぶしぶ手を離した。

終戦になり、同時に特高警察も当然廃止された。言論も自由になつたせいもあるのか、根岸刑事が酷かつた事は暫くは人の口にのぼつた。敗戦国の惨めさは、嫌という程味わつたが、平和の尊さは、何倍も嬉しかつた。

叱られてかくれて泣きいし梅の陰

吾かばうがに朱実ゆれいき

四才で母を、七才で父を亡くした私は、文久三年生まれの祖母イネの手一つで育てられたが、会津藩士の娘だつた祖母は何事にも「ならぬ事はならぬ」と厳しかつたが一方では深い愛情で私達姉妹を育ててくれたので、私は父母のいない淋しさはあまり味わわずに大きくなつた。

祖母は何時も私に、お伽話の代りに戊申戦争の話をしてくれた。実家は二瓶といいイネの祖父は玄武隊で御本陣に出られた殿様のお側に、父は青龍隊に十八才の兄は朱雀隊にとそれぞれ出陣し、残された

家族は早くお城に入れとの触れに、祖母、母、十二才の姉、六才のイネ、それに若党一人と女中二人の計七名がお城まで行くと門は閉ざされ城門の上の武士が「城はいっぱいだから落ちろう。落ちろう」と叫んでいる。落ちろと言うのは他の村あたりに逃のびよどの意味である。仕方なく引返し大町と七日町の四つ角まで来た時、「お城に火の手が上がつた。お城が落ちる」と逃げて行く人達が騒いでいるので、振返るとすごい黒煙だつた。二瓶一家は街道をそれた小高い丘の木立の陰に、若党に持たせた莫薙を敷き、城が焼けたからには、殿様も御自害遊ばされたに違ひない。我々も後を追うからと、祖母は女中に暇を出し若党に後始末を頼んだ。母は先ず一番小さいイネから懐剣を抜きイネを膝に抱いた時、祖母が「はやまるな、ちょっと待て」と言つて、若党に本当の事を見極める様に言つた。程なく帰つてきた若党により、硝薬蔵に砲弾が命中し火の手が上がつたとの事なので、やつと氣をとり直して下荒井への道を歩き出し、イネは今迄通り若党の背中に、坂下街道を大川端に急ぐ途中、男姿の娘子軍の方々が「お急ぎなされませ、敵はすぐそこまで来て居ります。お急ぎなされませ」と声を張り上げて叫んでいた。「薙刀を持つて」と祖母イネは雄々しい姿の娘子軍を思い出している様だつた。

やつと大川端の岸の小屋についた。その頃は、大川に橋がなく、対岸に行くには渡し舟しかなかつた。逃げて来た沢山の人で小屋に入りきれず病人も大勢いたが、祖母は何かの時の為にと女中に背負わせて來た鰹節と味噌をお汁にして振るまい、大変喜ばれたとの事。中には手を合わせて感謝し熱い味噌汁を飲んでいた人達もあつたとか。やがて紹介された下荒井の肝煎りの家に着き厚いもてなしを受けた。もう城下は彼方此方で火の手が上がって燃えている。祖父の所在はわかつ